

823-826)と、大唾液腺と小唾液腺という違いはあるものの、一致していた。

【結語】今回対象とした、口蓋の多形性腺腫と筋上皮腫では、CT及びMRIでの鑑別は困難であった。その一因として、生検による修飾が示唆された。しかし、多形低悪性度腺癌とは、T2強調画像の相違で、鑑別可能な場合があると思われた。

2 口腔癌の頸部郭清術後に出現した結節状構造の画像所見

林 孝文・田中 礼・小山 純市
平 周三・勝良 剛詞・益子 典子
西山 秀昌

新潟大学大学院医歯学総合研究科
顎顔面放射線学分野

口腔癌の頸部郭清術後の経過観察CT・USにおいて、しばしば頸部に結節状構造の出現をみることがあり、neoplasmと誤診する可能性がある。本演題では、頸部郭清術後少なくとも半年以上経過しmalignancyが否定的と判断しうる症例における代表例を供覧する。

〔症例1〕42歳・女性。臨床診断：右側舌腫瘍(T2N0)。舌右側半側切除術・右側選択的頸部郭清術施行。経過観察USにて右側オトガイ下部に紡錘形の結節状構造が認められ、内部は不均一な低エコーであった。画像上、肥厚性瘢痕の可能性が高いと考えられた。

〔症例2〕43歳・男性。臨床診断：右側舌腫瘍(T4N0)。舌右側半側切除術・右側選択的頸部郭清術施行。経過観察USにて左側頸動脈分岐部上方で内頸動脈後縁に沿って、上下に長い下端が盲端となった結節状構造が認められた。頸部郭清術後の切断神経腫として報告されているものと画像上類似していた。

3 MRIが有用であったじん肺に合併した肺癌の1例

奥泉 美奈・酒井 邦夫・森山 裕之*
高橋 正明*・井上 政昭**
能勢 直弘**・川口 誠***

新潟労災病院放射線科
同 呼吸器内科*
同 呼吸器外科**
同 検査科病理***

症例は73歳の男性で、42歳からじん肺健康管理区分管理3.口と決定されていた。

平成15年のじん肺健診で喀痰細胞診class V, 単純写真上、左下肺の腫瘤影の増大を指摘された。胸部CT上、両肺に結節影が多発しみられた。MRIでは、じん肺結節部はT1, T2強調像で低信号を呈するのに対し、腫瘍部はT2WIで高信号を呈していた。左下葉切除が施行され、扁平上皮癌の結果であった。MRIはじん肺結節部と腫瘍との鑑別に有用であった。

4 上腸間膜動脈解離：5例の検討

堀 祐郎・内山 早苗・奥泉 譲
伊藤 猛・西原眞美子・吉村 宣彦*

長岡赤十字病院放射線科
新潟大学医歯学総合病院放射線科*

【はじめに】孤立性の上腸間膜動脈解離は稀であり、経過や予後については未だ不明である。文献的には、外科的治療にて救命し得たというものが多く、保存的に経過観察し得たというものは少ない。今回我々は、孤立性の上腸間膜動脈解離5例を経験し、そのCT所見の経時的变化を検討したので報告した。

【対象・患者背景】CTにて確定診断した発症時期が明らかな孤立性の上腸間膜動脈解離5例(うちCTで経過観察できたのは4例)。年齢39～62才(平均52.4才)。全例男性。CTによる観察期間：18～1330日(平均555.6日)。

【結果】全例保存的に経過観察し得た。外膜濃染および血管周囲脂肪濃度上昇は、発症早期にのみ認められた。全例で偽腔の経時的縮小と真腔の経